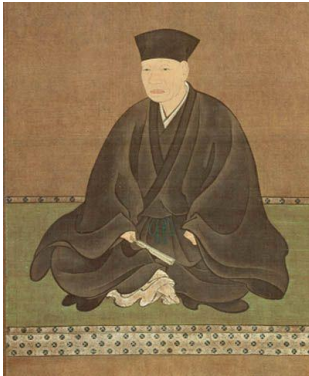


## 今月のみことば 2016年9月

「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」(マタイの福音書7章13, 14節)

# 千利休とキリスト教



日本文化を代表する茶道を大成した千利休が、秀吉に切腹を命じられてその生涯を終えたのは天正19年(1591)のことであった。それ以来、なぜあれほど寵愛された利休が秀吉の逆鱗に触れたのか、諸説紛々であり、いまだにその謎がすべて解明されたとは言いがたい。

ただ、利休とカトリックとの関係は以前より注目されていた。例えば、濃茶の回し飲みは教会の聖餐式と酷似している。

しかし、最近さらに興味深いことを知った。なぜ田中与四郎、号は宗易(そうえき)という本名とは全く違う「千利休」と名乗ったのか。

それは St. Luke、つまり聖ルカを日本風にしたのではないか、というのである。利休が用いた魚のマークも、ギリシャ語の「魚」 $\text{ix}\theta\upsilon\varsigma$  は、〈イエス〉〈キリスト〉〈神の〉〈御子〉〈救い主〉を示し、クリスチャンを表すコードネームであったことと無関係とは思われない。

もし、利休が事実キリシタンであったとすると、茶道の絶大な支持者であった秀吉は、気がついてみれば、キリシタンの宣伝者として利用されていた、ということになり、これが、激怒した本当の理由ではないか、というのもうなずける。

実際、茶道と聖書には密接な関係があるとすると、謎が解ける部分も多く、木戸、露地(ろじ)、蹲(つくばい)、躡口(にじりぐち)を経て茶室に至る、という行程は、狭い門から入れ、というキリストの教えを写しとったかのような印象さえある。

秀吉のような最高権力者といえども、余分なものを一切捨てなければ、茶室に入れない、とはなんという心にくい仕掛けであろう。作法として受け入れていた秀吉が、その背後にキリスト教信仰のメッセージが隠されていたのを知ったとしたら、憤激するほかなかったであろう。

この二人の対決の真の勝者はだれであったのか。それは秀吉さえも恐れぬ利休であったのではないか、と思えてならない。

神を恐れる者は、もはや他の何も恐れる必要がない、というのは、利休が到達した心境であったのかもしれない。

